

古文 随筆

徒然草

兼好法師

雪のおもしろう降りたりし朝あした



講師

畠山 俊

理解を深めるために

■学習のねらい■

作者の、今は亡き人とのちょっとしたエピソードから、手紙の作法について考えます。文法事項としては、古文の中で重要な働きをする助動詞について、その接続を中心に理解を深めます。

*

*

*

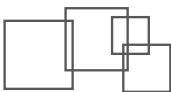
手紙の作法を知る

作者が、雪が趣深く降っていた朝に用件だけを記した手紙を出したところ、雪に触れないような風流を解さない人の言うことは聞けないと相手に言われてしまいました。

手紙には作法があります。

頭語……………拝啓など
時候の挨拶……………ここで雪のことなどに触れる
安否の挨拶……………「いかががお過ごしですか」など
本文……………「さて」などで本文に入る
結びの挨拶……………相手の健康への気遣いなど
結語……………敬具など
後付け……………日付、自分の署名、相手の名前

この形式が正式な手紙の作法になります。



助動詞の接続を理解する

助動詞 — 動詞、形容詞、形容動詞や体言などに付いて、意味や話し手の判断を添える活用のある付属語。

それぞれの助動詞は用言に付く場合、どの活用形に付くかが決まっています。これを助動詞の接続といいます。

完了の助動詞「ぬ」「たり」は連用形に接続する。

打消の助動詞「ず」は未然形に接続する。

推量の助動詞「む」も未然形に接続する。

断定の助動詞「なり」は体言にも接続する。活用語には連体形に接続する。

助動詞を正しく理解することは古文を正しく読むことにつながります。

作者の思いを読み取る

今回の出来事を作者は趣深いことだと言っています。そして、そう感じる理由を最後に書いています。この相手の人は亡くなってしまっているのです、このようになちよつとしたことでも忘れ難いというのです。この段の構成も、また、見事です。最後の一文で話がぐつと引き締まった感じがします。

■注意する語句

をかし（形容詞） 「趣深い、おもしろい」

き （助動詞 — 連用形接続、過去） 「た」

こそ （係助詞） — 已然形 係り結び（強調の働き）

●他の係り結び

ぞ、なむ（係助詞） — 連体形 係り結び（強調の働き）

や、か（係助詞） — 連体形 係り結び（疑問、反語）

徒然草

兼好法師

雪のおもしろう降りたりし朝

講師

畠山 俊

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべきことありて、文を
やるとて、雪のこと何とも言はざりし返り事に、「この雪いかが見ると、
一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるること、聞
き入るべきかは。かへすがへす口惜しき御心なり。」と言ひたりしこそ、
をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れ難し。

【第三十一段】

【現代語訳】

雪が趣深く降っている朝に、ある人のもとへ言い送らなければならないこと
があり、手紙を送ろうと思って、雪のことを何とも書かなかった返事に、「こ
の雪を見てどう感じるかと、ひと言もおっしゃらない程度の、風流を解さない
ような人がおっしゃることを、聞き入れることができましょうか（いや、でき
ません）。重ね重ね残念な（あなた様の）お心です。」と言ってきたのは、おも
しろいことであった。今は亡くなってしまった人であるので、この程度のちよっ
としたことも忘れ難い。